



* 0003493000 *

0003493-000

特241-873

天光年頭慕進の巻

天光社本部

昭和18

ABA

特241

873

★年頭の決意鐵の如く
★奮迅の慕進獅の如く
★一億の決死隊物凄し

天光年頭慕進の巻

★嚴寒凜然十五度全國民に望む
★更に防空の必勝完璧を期せよ
★公德殊に交通道德實踐を叫ぶ

特24
873

★盡忠報國の大本を説く臣民の道を明示す

- 繪寫眞 ○○防空司令官入江少將閣下揮毫と○○防空部隊
- 繪寫眞 近代戦突撃の圖、南京入城の圖
- 繪寫眞 百尺竿頭更に臨戦態勢を執る柴田天光社長の雄姿
- 繪寫眞 天下の名園兼六公園の明治記念碑と社長一行

天光臣道實踐の卷

□ 繪寫眞四頁入
B 六判洋裝美本
本文九十頁
正價金五十錢
送料金四錢

次目内容

臣民の道	………	文部省
防空必勝の要訣	………	防空參謀：難波中佐
秋霜烈日十度全國民に望む	………	天光社本部
大震災當時見事大猛火を撃退せる町内防火軍の偉功	………	天光社長：柴田外吉
戦時視察旅行	………	
國民學校の歌	………	

◎發行所 東京市本郷區 振替東京三五三〇五番 天光社本部
真砂町三十七 電話小石川六〇三六番

○滿八十八才の高齡米壽を重ね健康盡忠尙嬰鑠として壯者を凌ぐ奥平家母堂の眞筆○

○光風の橋重二城宮るすまし増を嚴尊と聖神に上が彌○



○史上空前の聖上伊勢大廟御親拜を洩れ承り一層威奮興起盡忠報國を強むる社長の熱筆○

●天光 奥平トミ
●正しく盡忠
●強く報國
天光社長 柴田外吉
昭和十八年一月

○る奉し唱高声大を歳萬下陸皇天度三てみ謹○

★委雄の上橋橋新都帝長社光天田柴るせ行断を進慕頭年★

★燃料節約と交通緩和の爲銀輪を駆つて盡忠精神の昂揚を大聲高唱す



★人的物的資源確保の爲防空と交通に主力を注ぎ言論に文章に熱烈正に天下無比

★す戦奮躍勇日連に導指地現に共とるす行實ら親★

○婚新の彦吉田柴男長長社しせ果を忠盡年三滿役現○

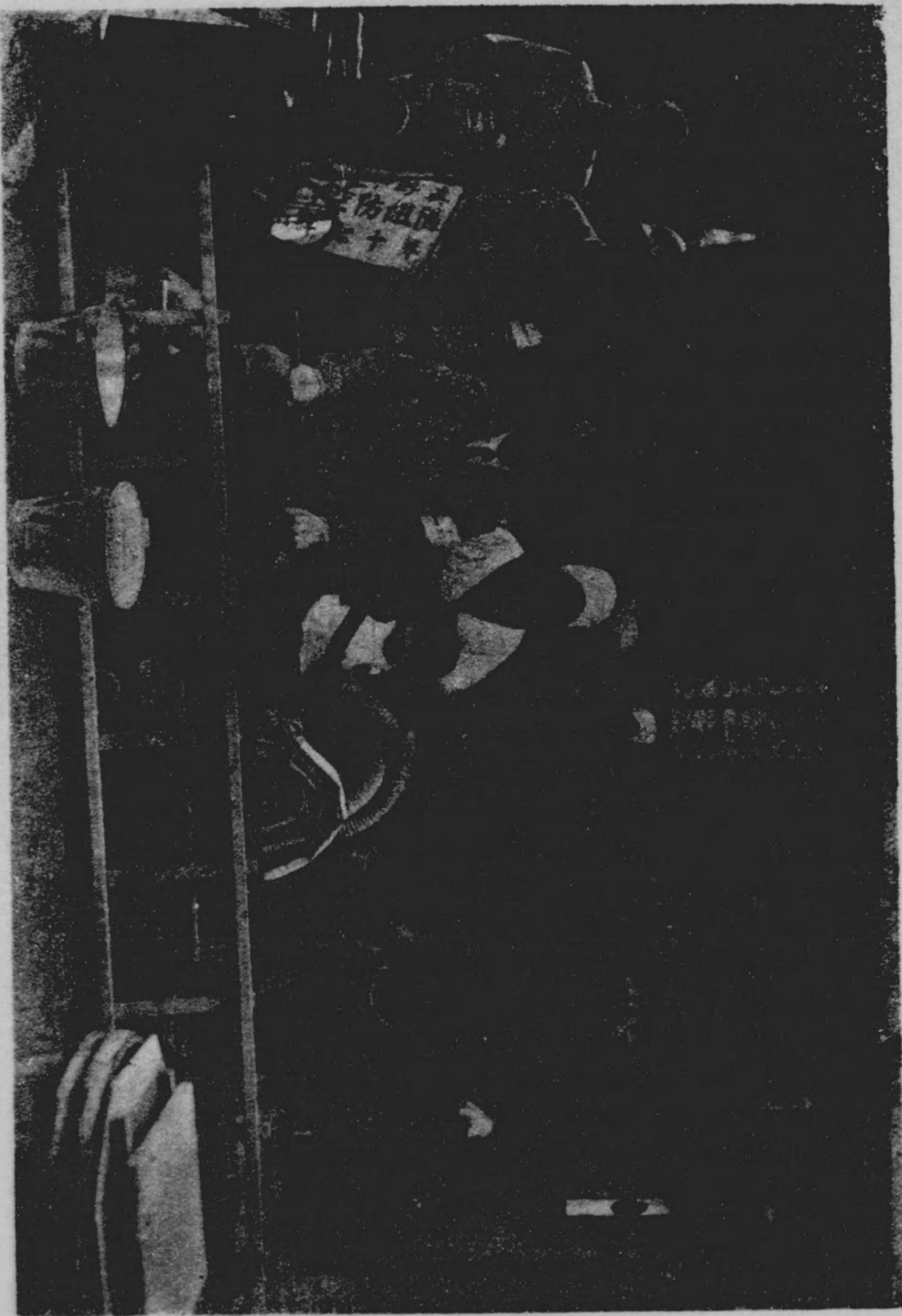
新婦は身長五尺五寸心身共に健全國土防衛の大任を奉ずる事滿三年更に勤務中



新婦は身長五尺五寸心身共に健全國土防衛の大任を奉ずる事滿三年更に勤務中

○事慶の家田柴長社光天るせ行断に實如を策國の勵獎婚結○

★防空必勝三則資材の整備全員の出動日頃の猛訓練★



★帝都十二万全国百二十万防空郡に聊か模範を示す★

原豊、川柳、藤加、山西、人夫田得、人夫興龍、田荒、妻夫田前、非永、興龍りよ左て向★
★々々の闘奮群擧各の長群田柴はるけか腰列前 田松、人夫宮小、田太

★嚴寒凜然十五度全國民に望む

百年の大計は第一年に在り一年の計は元旦に在り、皇紀二千六百
○三年昭和十八年大戦下二回目の新年の迎へたるは無上の光榮と
共に愈責務の重大且深刻なるを痛感せざるを得ない、即ち本年の
戦局は恰も新進氣鋭の一力士が同時に東西の老大横綱兩力士を相
手に無限の土俵に於て遺恨角力を正々堂々名乗を擧げて勝敗を決
する天下分け目の必殺相撲の如く、誠に古今未曾有の大決戦重大
時局であるのである。今や全國民は眞に必勝の信念と決死の覺悟
を以て總力を擧げて一億の決死隊物凄く驀進せねばならぬ。

○天光社本部

社長 正八位 柴田外吉
社員 一同

昭和十八年一月一日
國旗と天光旗を高く
陛下の萬歳を唱へつゝ



一死其本分を盡したる忠烈無双なる護國の英靈に對し謹んで赤心を罩めて感謝し厚く其忠魂を慰め其遺圖を飽迄も貫徹せんとす。

皇紀二千六百〇三年
昭和十八年一月

○天光社本部

歴代天皇の御神靈と護國の英靈に對し奉り謹んで誠意を罩めて大東亞戦争に於ける皇軍の必勝武運長久と皇國の大使命貫徹とを祈願す。

皇紀二千六百〇三年
昭和十八年一月

○天光社本部

★年頭の決意

内閣總理大臣 東 條 英 機

昭和十八年の元旦を迎ふるに當り謹みて聖壽の萬歳を壽ぎ、彌榮えます竹の園生の御繁榮を祝賀し奉る

畏くも天皇陛下におかせられては曠古の大戦争に際し格別御多端なる政務軍務に御精勵あそばされ、曩には忝くも戦争遂行の途上において神宮を御親拜あそばされ、皇祖大御神の大御前において御親ら御告文を奏せられ御拜あらせ給うたのである、この御事たるや、有史以來未だ曾てこれあらざる御事と拜承致し、聖慮の程を拜察し奉り寔に恐懼感激の極である我等臣民は今大戦争の持つ未だ曾て見られざる重大性に思を致し、益々報效の誠を竭し、宸襟を安んじ奉らんことを深く期する次第である
今や帝國は戦争第一年において早くも大東亞における米英蘭の兵力を一掃し、廣大なる地域にわたる數多の戦略要點を攻略すると共に直に戦力化し得べき巨大なる重要資源を確保し、こゝに、大東亞戦争完勝の基礎を確立し萬邦共榮の肇國以來の大理想實現の足場を固むるを得るに至つたのである、しかして帝國は、今後飽くまでもこの必

勝の基礎を強化擴充しつゝ、盟邦諸國との提携を愈々積極化し、相呼應して米英に對し益々攻勢を持続し、以て究極の勝利を獲得せんことを期してゐるのである。この秋に當り、獨伊等歐洲における盟邦諸國は帝國との結束いよいよ堅く、あらゆる艱苦を克服して、依然として世界を驚倒せしむる大戦力を隨時隨所に發揮して居るのである、また滿洲國は國礎愈々固く北邊の鎮護の任を分つと共に、我が戦力増強に多大の貢献を致し、しかして中華民國は日に日に其の力を育成強化して着々として帝國に對する後方補給の重任を果しつゝあるのである、「タイ」國また既に日「タイ」攻守同盟一周年を迎へ、帝國と歩調を合せて、共同目的達成に邁進してゐるのである。翻つて皇軍の占據せる地域における各住民は、皇軍の整々たる軍政の下に、帝國の眞意を諒解し、共同目的達成のために、着々として帝國に積極的に協力し來つてゐる、以上の如き情勢に臨み、敗戦に次ぐに敗戦を以てせる敵米英も、最近に至り漸く反攻の舉に出でんとしてゐるのである、しかしながら前述の如く、我が必勝の基礎は出來上つてゐるのである、ここにおいてか、われわれ、銃後國民に残された問題は、如何にして大東亞十億の人々の中核となつて、大東亞におけるこの多數の人と豊富なる物とを活用して、作戦の要求に即應し得る如く、戦力を増強するかに在る、一億同胞眞に火の塊となつて戦力を増強し得ば既に約束せられたる勝利の榮冠は必ずや、我等の頭

上に輝くのである

★二度新体制即時斷行を熱叫す

天光社長 柴田外吉

古今未曾有の大戦争中殊に本年こそは將に大局の勝敗を決する大決戦に直面して居るのである此空前の超重大時局に際し未だに舊体制を脱し切れず一億新体制前進の歩調を紊す者が相當あるのは實に慨歎に堪えない。生活に職業に交通に防空に迷信に奉仕に社交其他に於て有形無形上新体制を叫ぶ者は多いが之を實行する者の比較的少いは實に遺憾千萬である今や新体制の是非を論ずる時代は過ぎ去り一日も早く實行せねばならぬのである一日遅るれば夫丈戦争を長引かせる計りでなく我方を不利に導く事となるのであるから、好むと好まざるとに拘らず即時斷行すべきである銃後國民の盡忠報國は新体制即時斷行に在りと云つても過言でないのである。筆者は近衛内閣時代より再三再四新体制即時斷行を叫ぶと共に直に率先實行しつゝあるのである其要訣は先づ常に時局を正しく認識し快く自發的に進んで斷行し他人の批評は之れ誤れりとの

強き自信を持ち、他人も何れ後れ走せながら我に従いて来るものと思へば何の苦もなく出来るのである、嫌々ながらやらうと思ふから苦痛と思ふので進んで自發的に斷行すれば苦痛を感じない計りか却つて新体制を謳歌する様になるものである又之位の勇氣を出せない様では大戦時下の國民の資格なしと云はれても仕方がないのである。考慮無用即時斷行を三度叫ぶ所以である。

★更に防空の必勝完璧を期せ

防空群長 柴田外吉

防空訓練は年一年と強化されて來たが實戰即應には未だ十分とは云へないのである、晝間の基本訓練は先づ卒業したと云つても宜いが夜間の不意打訓練を猛烈果敢にやる必要がある夜間は晝間と異り殊に暗黒の夜間にあつては單に交通する丈でも容易でないのである況んや不意打に動作するのであるから非常にやり難いのである小石一つでも小溝一つでも飛んだ怪我する事があり又ポンプの放水口と吸水口とを間違ひたり其他の防空資材の取扱も非常に難しく意外の時間を費し手遅れとなる事が度々あるも

のであるから、今後は晝間よりも寧ろ夜間の不意打訓練に重きを置き何回でも訓練を重ね、十二分に熟練する様指導者と一般國民に特にお奨めする次第である。我が防空群では先づ率先實行したのである。(口繪寫眞參照)

今少しく左に其概要を述べて帝都十二万全國百二十万餘の防空群長進んで一億群員の參考に資し度いと思ふのである。

一、名稱 大日本帝國東京市本郷區眞砂町三十七番地眞砂下町會家庭防空群第十七

隣組防空郡

二、內容 戶數十戶、世帯主十二、人口六十六人、防空資材は各戶規定備付の分の

外に共同使用の物町會備付の東京市より下付の本格的ポンプ一台、小型一人用ポンプ二台、梯子二丁、鴛口三丁、四匙一丁、吹十枚、棕櫚繩一筋、防火用水槽二個 砂(バケツ五杯分) 火叩二本、バケツ二個、メカホン一個井戸一箇所浴場用モーター井戸一箇所で十分ではないが資金の都合で將來益整備する豫定

三、役割

群長	柴田外吉	警備主任	加藤隆久
副群長	前田喜弘	老幼主任	得田友次郎
副群長	永井清	交通主任	柴田外吉

防火主任	龍興守道	連絡傳令	白石始
防毒主任	加藤隆久	兵站長	横井武次郎
防亂主任	柴田外吉	炊事主任	永井清
工作主任	前田喜弘	見張救護及 防空担任は	群員全部

四、鐵則 防空必勝三則として イ、防空資材の整備 ロ、隣組全員の出勤

五、猛訓練

訓練我が愛する隣組防空群は豫てより猛訓練に重きを置き最後の仕上げは常に猛訓練にありとの信念の下に率先實行しつゝありしが昨秋遂に我國最初の試みとして不意打雨中夜間訓練を斷行したのである即ち昭和十七年十一月一日は雨中にも拘らず全員出勤猛訓練を猛烈果敢に不意打に斷行し翌二日は引續き夜間不意打訓練をなし、八日の大詔奉載日には拂曉戦を敢行し終了後記念撮影を爲したのである。此尊き体験に基き夜間不意打猛訓練の必要且急務なるを痛感したのである。

ハ、正常日頃の猛訓練

★公德殊に交通道德の普及と實踐を強化せよ

正貫部長 柴田外吉

交通道德の遵守實行の必要且急務なる事は今更此處に多言を要するにも及ばないが其現狀を目撃しては黙する事は出来ないのである、況んや大戰時下人的物的資源確保の爲、是非共即時一億國民悉く實行して貰いたいのである何となれば交通道德は特異性を持ち九千九百九十九万九千九百九十九人の國民が正しく實行しても唯一人の違反者の爲之等多數の人々が迷惑被害を蒙るのであるから全國民悉く實行してこそ始めて其の完璧を期し得るのである。其理由は相對的道德であるからである、故に野山の一本道を一人で歩く場合は必要もないが苟くも相互に異なる方向より來る人車馬二人以上ある時は必要を生ずるのである況んや六百五十萬餘の人口を有する我帝都大東京市にあつては特別に交通道德の必要を痛感するのである。皇軍は世界無比であるが全國民の交通道德の成績は世界第二流と遺憾ながら言はざるを得ぬ一層の奮起を望むのである。毎日毎夜交通事故の爲死傷並に損壞する人や物の損害を見ても判るのである之を

全滅して少しでも戦力擴充に資せねばならぬ。之即ち銃後國民の手近い盡忠報國である。

私は昭和十年以來滿八年間交通道德の普及と實踐に大聲高唱するのみならず實地街頭に進出して現地講話と現地指導して居るのである即ち晴雨に拘らず市電春日町交叉點を始め宮城二重橋前、銀座、日本橋、上野廣小路、九段坂上下、神保町、品川驛前、日比谷、震災記念堂前、本郷三丁目、水道橋、三越本店前、馬場先門、其他重要地點に進出して熱烈無比に講話指導するのみならず、隨時隨所に到り身親ら正しく交通道德を實踐しつゝ、他の不實行者を教導して居るのである。(口繪寫真參照) 此得難き尊き體驗に基き左の金言を發表する

○交通五則

- 一、守れ信號車も人も
- 二、右左を見てから横斷
- 三、人は歩道車は車道
- 四、無理と油斷は事故の因
- 五、注意一秒怪我一生

★五度隣組精神の發揮と實行を促す

隣組長 柴田外吉

凡そ人類生活發生進歩の順序は個人—家庭—隣組—等々の順序を経て今日の如き國家を爲したのである。故に他人家族と親和し共同生活や相互扶助を爲す源は先づ隣組から發生した譯であるから之を擴大強化すれば世界一家八紘一字となるのである従つて八紘一字の發生單位は隣組であると云つてよいのである。かるが故に隣組精神の完全なる發揮こそ八紘一字大精神の根源をなすのであるから全國民は悉く此精神を振作し實行すべきである、近來は大分完全に近づきつゝあるが未だに一部舊体制の人々殊に資産及權力階級には多少残つて居て十分に發揮しない者があるのは大戦時下の國民として實に憤慨に堪えないのである之等の人々は卒先して模範を示さねばならないのに却つて下層階級から促されて澁々ながら追隨の形式丈を取つて居るのは實に遺憾千萬である、之等の人々は時局を認識しないのか、それ共長年の利己主義が脱し切れないのか知れぬが最早今日では一日も許す譯には行かないのである。畏くも一天萬乘の天皇陛下御親ら肇國以來前例のない戦争の真最中に伊勢大廟に行幸戦勝祈願遊ばされ

たのである此一事を以てしても如何に今回の大東亞戦争の空前の大戦争であり殊に本年は大勢を決する大決戦の年であるかが判るのである。判つた以上過去は咎めず今日只今改め其實行をせねばならぬ。團結心を強くし共同作業を圓滿完成し、有無相通じ共に働き共に遊び共に苦を嘗め共に欠乏に堪え共に助け合ひ共に教へ合ひ共に災害を防ぎ共に病苦を治し共に健康を増進し共に學び修め物資不足ながらも常に明朗平和なる生活を保持せねばならぬのである。

敢て五度熱叫す「隣組精神の發揮と實行を即時擴大強化せよ」と。



強兵
健民

健康第一實行の急務

健康部長 近藤由太郎

平戦兩時を通じ古今東西を問はず健康第一の必要なるは今更喋々多言を要する迄もない、況んや此空前の大戦時下に於ては一層其必要且急務なるを痛感するのである即ち敵國人口は米國約一億三千万英國約四千五百万蔣國約二億此三國丈でも合計三億七千五百萬余である此外濠洲等を加へれば大約四億余となるのである。此大敵を僅か四分

の一の一億人口を以て撃滅しやうとするのであるから日本人一人で敵四人を相手にせねばならぬ換言すれば我一億國民は四倍の戦力を發揮せねばならぬのであるから先づ第一に健康を増進し一億悉くが健民とならざるを得ないのである。然らずんば長期に渉り勝ち抜く事は出来ないのである。武力戦に働く軍人に見ても悉く甲種合格の人計りであるとすれば現在百萬の軍隊は將來數百萬の軍事能力を發揮する事となるのである其威力たるや偉大なるものとなり此精銳を以てすれば大敵決して怖るゝに足らないのである。銃後の經濟戦に働く人も其通り同じ人數で四倍の能力を發揮する事になれば長期大決戦敢て恐るゝに足りないのである。かるが故に健康増進体位向上の必要且急務なるを事新しく聲を大にして叫ぶのである。近時我政府に於ても頻りに強兵健民を叫ぶ所以も此處にあるのである。然らば如何にして健康増進を計るか又何を標準として体位向上を計るかと云へば正しく強く而かも前線銃後を問はず實際に十分國家目的の仕事に働き、且永續出來る身体に國民全部を鍊成するのであるから之を間違はない様にせねばならぬ例へば徴兵検査に不合格となるやうな徒らに大兵肥滿の横綱型人間や長身瘦軀の人間等丙種以下に相當する様な体格の持主にしてはならぬのである夫が爲には從來運動界にあつた選手制度の如きは全廢し國民全部が体位向上する様な運動方針を採らねばならぬ之は指導者として十分注意すべきである。其方法としては幼

年、少年、青年、壯年、初老、中老、高齢に即應して健康法を採用せねばならぬ其他一部局のみを研究専門とする様な醫學者や衛生家や言論學說文を發表して身親ら實行した事のない者の意見を輕卒にも其儘鵜呑にして採用せず十分實際に効果あるや否やを實驗した上採否を決すべきである。尙健康増進の方法指針として既刊天光健康増進の卷に本社長柴田外吉氏の五十年体験に基き詳説してあるから此處では省く事とする因に私は身長五尺五寸体重十八貫内外早寢早起病氣知らずの体格の持主である。

★更に總親和總努力を叫ぶ

相談部長 奥平丈太郎

この時大東亞戦争を戦ひ抜き最後の勝利を得るためには總親和なくてはならぬ一家の親和は一隣組一町内會一區内一市内會の親和となる其親和に追従するは即ち總努力なくしては完遂出來ぬ國民皆更に總親和總努力を叫ぶ。
畏くも明治大帝の御製に「國を思ふ道に二つはなかりけり戰の庭に立つも立たぬも」と御示し遊ばされたのであります戦線も銃後も親しく總努力以て新しき春を迎へ第二

年目の大東亞戦争を勝抜き覺悟をして聖恩に應へまつる

私共は胸を躍らせて刻々のラヂオの前に立ち眼を輝かせて朝々の新聞を手にする捷報又捷報大君の御稜威の下戦つて勝たざるなき皇軍の大戦果は曾て一度も私共の期待を裏切つたことはないのだ萬歳又萬歳私共の心は今戦勝の歡びに溢れてゐる、しかし私共は決して忘れてはならぬ私共にこの歡びを與へたものが何であるかを。忠烈なわが將士は私共がかうしてゐる今のこの瞬間においても血を大陸の土にそゞぎ屍を南海の波に漂はせつゝあるのだといふことを。

出征將士に對する私共の感謝はこれを實行によつてあらはさねばならぬ戦地への慰問もそれだ遺家族への援護もそれだ傷痍軍人への奉仕もそれだ同時に農夫は食糧増産のために鑛夫は金屬増産のためにその他各方面の人々みな前線の意氣をもつて萬難不屈飽くまで戦ひ抜くことによつて國民感謝の誠をあらはさねばならない。

聖恩到らぬ限もなく 畏くも 天皇陛下には各地に侍従を御差遣遊ばされて銃後の生活のみをなはさせ給うたこのありがたさに感泣するにつけてもこの聖旨にこたへ奉ること即ち出征將士に應ふる道でなければならぬ。

たゞこのことが一時的の感情端的にいへば線香花火のやうに一時は非常な勢ひで軍人援護軍人援護と國民の熱情が燃へあがるが時期が経つとすうつと調子が低くなつてつ

まり低調になつてしまはれてはこれまた非常に困るのである例へば支那事變の勃發當初わが將兵は町村の人々から驛頭に旗を振り歡呼をあげて送られて出て征つた見送る者はひとしく熱情に燃へていたのであつた。また大東亞戰爭の緒戦に於てあのやうな大戦果が擧つたと云ふ場合にも國民の感情は非常に高潮に達したさういふ場合は軍人援護の方も期せずして盛り上つて行つて少しも心配はないのであるが、だん／＼時日が経過して來るとその氣勢がいつとはなしに薄らいで調子が低くなつて行きやすいから不斷警戒する必要がある。此時總親和總努力協力一心萬難不屈を叫び來るべき本土空襲に國土防衛に協同努力して此聖恩に報ひ奉るべきである。

★時局と青年

青年部長 白石 始

人間の歴史あつて茲に五千載、興亡迎接に違なき中にありて克く千年一系を傳へ得て、昭乎として日星の如き、光輝ある國体の精華を擁しつゝ、皇紀二千六百有余年を経

たる偉大なる神國日本。

この雄渾なる皇國日本が過ぐる滿洲、支那兩事變を契機として東亞新秩序建設の聖業此の緒に就かんとするや笑止にも貪慾飽くなき英米は與黨を誘ひ、無法にも皇國の行進を妨害せんとす。

然るに畏くも宣戰の大詔渙發せられるや、あの歴史的感激の長より茲に滿一年、皇軍の行く處常に赫々たる戦果と、着々たる建設に、世人驚歎せざるはなく宛ら神業の如く嘗ての神武創業の昔、御東征の御戦を想記せしめて余りあるものあり、吾人はこの國民的感激に喜悅すると共に、外世界情勢の複雑なる變遷と、内國內諸態勢の劃期的刷新の機會に際會し、盟邦との聯絡提携を密にすると共に一億國民舉げて砥礪切磋の要、今日より切なるものなきを痛感する次第なり

就中この千載一遇の好機に生を享け、光榮ある任務を分担負荷せられ以て、興亞の一臂たる爲、其の洋々たる前途に圖南の志を抱き、大和民族興隆の一試練を突破する皇國青年の胸中や如何。

古來青年は第二國民として其の將來を囑望せられ、青年は未完成のものにして、青年期を唯一無二の修養期なりと謂はれた、又嘗つての獨乙鐵血宰相ビスマルクの

“汝の國の青年を示せ、然らば汝の國の將來をトさん”

の一言は千古の金言として教へられた。

勿論青年の將來性を重視し第二國民としての修練を思ふは不可なしと雖も其の將來の爲にのみ終始し、之れを以て能事終れりとする事が出來得様か？

否斷じて然らず殊に現下の如き超非常時に於てをや。青年は第二國民に非らず、まして未完成のものに非らず青年は須らく青年特有の純真で無打算的で、決死的であるその本領を發揮して敢然國難の第一線に立上るべきである。

試みに史實の一端を見よ、明治維新の大偉業の礎石を爲せし志士を。時の大英帝國の暴政に激し「吾れに自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」と獅子吼したあの無名弱冠の青年バトリック、ヘンリーを、敗戦のどん底より全歐に覇を爲す偉大なる大獨乙帝國は卒伍より身を興したヒットラー一人の所産では決してない。そこには青年の熾烈なる情熱と、死闘の所産あるのみなり。

斯く考へ來る時、米英を絶滅し、アングロサクソンを世界史上より抹殺するは、獨り青年あるのみであり、曠古の大業は獨り青年の力に依つてのみ達成せらるべきものなり。

如斯青年の時局的要請に思ひを致す時、青年の進路自ら明なるものあり。手に鋤を持ち、耕作にいそしむもよし、大衆に向ひて蒙を啓發するもよし、皇軍の一員として

勇躍壯途につくは更によし等々、

如何なる職場、如何なる地位につくも其の根本を爲すは精神即ち信念の問題である。換言すれば日本及日本民族の眞價を再認識し、日本精神の發揚に終始する事に盡きるものと信ず。

是れが完全に認識された曉には懈怠が排撃され、遊墮が排撃され、奢侈が放縱が凡て排撃される事は必然である。

凡そ洋の東西を不問、世界各国には夫々の國の持つ精神即ち國家精神があり、各々異つた特徴を備へた精神を有するものである。その國民精神は長短兩に相俟つて一大潮流を爲すものにして、國民は各其の長を採り短を補ひて地上に生育を續ける所に向う上があり進歩がある。然るに獨り日本精神のみこの例外を爲す。それは眞の日本精神たるものは寸毫と雖も短所として指摘する點のなきものなり。

日本精神はこれを体得して然る後にこの精神を採長補短するの必要を認めず、唯國民は全体としての日本精神を把握するに努力するのみである。

從而世上往々にして日本精神を以て忠君愛國なり、大和魂なり、或は忠孝一本なりと定義するを聞くも、こは盾の一面のみにして日本精神の一半に過ぎず上述の如く完全なる日本精神の体得される曉はこの精神を修正すべき何ものもなきものなり。

建國以來茲に三千年、國運隆々として日に榮へ、月に進む、富嶽の如く亦櫻花の如き、世界に無比の國體をして益々光輝あらしめ、我が國威を宇内に宣揚して窮まる處なきは皆是れことなく日本精神の展開に基因するものに外ならざるものなり

然らば日本精神とは如何それは「滅私」の二字に盡きる。

「滅私」滅私がある一面に於ては一死君國に報ゆる忠君愛國となり、亦重盛の諫言となり、或は亦大石の行動となりて武士道の精華と喧傳され、大和魂として説かれるのである。

吾等の胸底には此の神國に生を享けた瞬間に於て、この雄大なる無欠の日本精神が脈々として底流してゐるのである、従つて大和民族の生活過程に於ては必然的に日本精神に依る日本特有の趣味、様式、或は風俗が生まれて來るのである

然し乍ら夫れは不知不識の間に底流する精神の一顯現に過ぎざるものなれば吾人は切磋琢磨する事によつてこの内燃する日本精神を外に發揮する様努めなければならぬ其處に青年の不斷の修養の眞義があるのである

吾人若人たる者宜しく、克己、忍耐、勤勉への自己修養に拍車をかけ之れが日本精神の完全体得に邁進すべきで其處には大義に立脚した腹の處世訓が擡頭して來るのである、吾人青年は三プラス三は六であり、5+5=10と言ふ現狀に甘んずべきではな

い。二に二を加へてそれが五であり、或は三である處に超非常時克服の原動力があるのである

吾等は吾等の力を以て、彌榮に彌榮する皇國をして世界の平和、人類の福祉に貢献すべき現代青年の社會的責務に深く思ひを致し之れが根本たる日本精神の完全顯現に、ひたむきの努力を傾注する様青年の蹶起奮闘を期待して已まざるものなり。

◎新体制を以て斷行せる 社長長男の新婚式

總務部長 柴田文次郎

正しく常に新体制を卒先實行しつゝある天光社長柴田外吉氏は長男柴田吉彦君の新婚式を目出度新体制を以て昭和十七年十一月二十八日皇國兵制發布七十年記念日をトし舉行した。先づ入口正面高く内閣總理大臣平沼騏一郎揮毫の「天光」の額は周圍に金色燦として輝き由緒ある日章旗の丸額又高く照し其下方には「天光道」の赤襷を配し東海に輝く日の出の圖を現し、左方の應接間には明治大帝戰勝觀艦式、教育勅語其他

の大小教育修養上須要の額面を安置し次に式場は同家二階六疊四疊半二間を打通し南方の高處には我皇室の御寫眞を恭々しく奉掲し其下には林銑十郎陸軍大將と有馬良橋海軍大將の揮毫せる「天光」の額面を掲げ右端には柴田天光社長が支那事變突發の劈頭明治神宮に武運長久を祈願參拜せる寫眞を掲げ其下方に左の如き新婚式順序書を貼り出してあつた。

○新婚式順序 (舉式と披露)

- 一、午后四時一同着席
- 二、開會の辭
- 三、宮城遙拜
- 四、默禱
- 五、國歌君ケ代二回齊唱
- 六、教育勅語捧讀
- 七、軍人勅諭捧讀
- 八、對米英大詔捧讀
- 九、誓の祝言盃事
- 十、高砂の謠曲
- 十一、來賓祝辭
- 十二、本人答辭
- 十三、親父答辭
- 十四、聖壽萬歲
- 十五、天光社萬歲

一旦休憩

(此間に新郎新婦打揃つて我家の神棚に向ひ新婚の奉告參拜し次に佛前に向ひ我家の祖先の靈に對し新婚の奉告參詣を爲し次に近所の家々へ挨拶に廻り記念撮影を爲す)

- 十六、午后五時披露開宴の言葉
- 十七、些かな小宴
- 十九、余興色々々
- 二十、閉會の辭

十八、來會者紹介

以上

二十一、自由散會

昭和十七年十一月二十八日

兵制發布七十年記念日

- 新郎 柴田 吉彦
- 新婦 平野 きよ
- 司會者 柴田 外吉

東方の高處には田中國重陸軍大將の揮毫せる「神光」の額面は金色燦然として輝き恰も光は東方よりを思はしめ其左右には天光旗と大洋旗は今日の宜き日を壽ふが如くはためき其下方の左右には備前長船の大刀と世界唯一の紋章を有する軍刀を置き、東南方に臨時設けたる床の間には松竹梅鶴龜の目出度掛圖(江戸時代の画家、松村景文の描ける)蓬萊島あり、其柱には本人勇躍出發當時肩にせる「盡忠報國」の襷あり其又下方には台灣水牛の角製花生には菊花清香を放ち萬年青の鉢には日の丸の小旗ひらめき。西方の高處には本人吉彦君北滿バルビン郊外にある加茂部隊へ出動せる當時佩用せし新式陣太刀型軍刀は恰も本日(の)盛儀を壽ぎ且守護しつゝあるかの如くに見受けられ何れも古物の間に合せ計りで新調せるものは無いが式場肅然として神聖其物であつた。流石は天光社長として常日頃高唱せる通り物質的には極力簡素を旨とするが

精神的には飽く迄も嚴肅であるには大に敬服したのである。殊に服装も親父柴田外吉氏は古色蒼然たる三十年前の明治時代の將校軍服其儘を着用し本人吉彦君又軍服其儘であつた新婦の服装は最初モンベ姿を主張せしも舉式前は柴田家の人でないのて其處迄は無理強いをせず本人の任意にしたが之も姉のものを着用したとの事で服装の新調はなく實質的には新体制に副ふたのである。近親者のみの參會とて計二十名足らずであつたが何れも戦時下新体制に基づき時間勵行嚴肅なる裡にも和氣靄々瑞氣堂に滿ち而かも最後の余興意外に彈み出し誠に一同十分満足の体であつた、而かも天氣快晴、四海波穩かに目出度滞りなく終了した。誠に柴田家萬歲天光社萬歲と稱すべきである。尙參考として一般家庭舉式の方に申しますが新体制の結婚には一切祝物の返禮はせず唯記念として寫眞丈を贈る事になつて居ますから一寸御斷りして置きます。

◎清遊室

日頃の勞苦を慰め更に翌日の新銳氣を蓄積する爲大に清く遊び上下同輩相互に親和を増し協力を強化しませう

イ、愛國百人一首

淺川清流

皇は神にしませば天雲の雷の上に應せるかも
 大宮の内まで聞ゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び聲
 やすみししわが大王の食國は大和も此處も同じとぞ念ふ
 千萬の軍なりとも言舉せず取りて來ぬべき男とぞ念ふ
 土やも空しかるべき萬代に語り續ぐべき名は立てずして
 旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群
 丈夫の弓上振り起し射づる矢を後見む人は語り繼ぐがね
 御民吾生ける驗あり天地の榮ゆる時に遇へらく念へば
 大君の命 恐み大船の行きのまにまにやどりするかも
 あをによし寧樂の京師は咲く花の薫ふがごとく今さかりなり
 あしひきの山にも野にも御獵人得物矢手挟み散動りたり見ゆ
 わが背子はものな思ほし事しあらば火にも水にも吾なけなくに

柿本人麻呂
 長奥麻呂
 大伴旅人
 高橋蟲麻呂
 山上億良
 遣唐使使人母
 笠金村
 海犬養岡麻呂
 雪宅麻呂
 小野老
 山部赤人
 安倍女郎

新たしき年のはじめに豊の年しるすとならし雪の降れるは
 唐國に往き足らはして歸り來む丈夫武雄に御酒たてまつる
 天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるか
 大君の命かしこみ磯に觸り海原渡る父母を置きて
 眞木柱はめて造れる殿のごとくいませ母刀自面變りせず
 霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に吾は來にしを
 今日よりは顧みなくて大君のしこの御楯と出で立つ吾は
 天地の神を祈りて幸矢貫き筑紫の島をさして行く吾は
 ちはやぶる神の御坂に幣奉り齋ふいのちは母父が爲め
 降る雪の白髪までに大皇に仕へまつれば貴くもあるか
 天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く
 翁とてわびやは居らむ草も木も榮ゆる時に出でて舞ひてむ

葛井諸會
 多治比鷹主
 紀清人
 丈部人麻呂
 坂田部麻呂
 大舍人部千文
 今奉部與會布
 大田部荒耳
 神人部子忍男
 橘諸兄
 大伴家持
 尾張濱主

海ならずたへる水の底までも清き心は月ぞ照さむ
 山のこと坂田の稻を抜き積みて君が千歳の初穂にぞ春く
 もろこしも天の下にぞ有りと聞く照る日の本を忘れざるなむ
 君が代はつきじとぞ思ふ神かせやみもすそ川のすまん限は
 君が代は松の上葉におくつゆのつもりて四方の海となるまで
 君が代にあへるは誰も嬉しきを花は色にもいでにけるかな
 みやま木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり
 宮柱したつ岩根にしき立ててつゆも曇らぬ日の御影かな
 君が代は千代ともささじ天の戸やいづる月日のかぎりなければ
 昔たれかかる櫻の花を植ゑて吉野を春の山となしけむ
 山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも
 曇りなきみどりの空を仰ぎても君が八代をまづ祈るかな

菅原道眞
 大中臣輔親
 成尋阿闍梨母
 源經信
 源俊賴
 藤原範兼
 源賴政
 西行
 藤原俊成
 藤原良經
 源實朝
 藤原定家

末の世の末の末まで我國はよろづの國にすぐれたる國
 西の海よせくる波も心せよ神の守れるやまと島根ぞ
 勅として祈るしるしの神風に寄せくる波はかつ砕けつつ
 思ひかね入りにし山を立ち出でて迷ふうき世もたゞ君の爲
 もののふの上矢のかぶら一筋に思ふ心は神ぞ知るらむ
 命をば輕きになして武士の道よりおもき道あらめやは
 限なき恵みを四方にしき島の大和島根は今さかりなり
 かへらじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞとどむる
 鶏の音になほぞおどろくつかふとて心のたゆむひまはなけれど
 君をいのるみちにこそげば神垣にはや時つげて鶏も鳴くなり
 いのちより名こそ惜しけれものふの道にかふべき道しなれば
 あふぎ來てもろこし人も住みつくやげに日の本の光なるらむ

藤 森 津 北 楠 藤 源 菊 藤 藤 中 宏
 原 迫 守 島 木 原 池 原 原 臣 覺
 實 親 國 親 正 爲 致 武 師 爲 祐 禪
 隆 正 貴 房 行 定 雄 時 賢 氏 春 師

あぢきなやもろこしまでもおくれじと思ひしことは昔なりけり
 富士の嶺に登りて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり
 行く川の清き流れにおのづから心の水もかよひてぞすむ
 ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の跡をみるのみ人の道かは
 大御田のみなわも泥もかきたれてとるや早苗は我が君の爲
 ものふの兜に立つる鍬形のながめがしはは見れどあかすけり
 すめ神の天降りましける日向なる高千穂の嶽やます霞むらむ
 天の原てる日にちかき富士の嶺に今も神代の雪は後れり
 千代へぬる書もしるさす海つ國の守りの道は我ひとり見き
 われをわれとしろしめすかやすめらぎの玉のみ聲のかゝるうれしさ
 あし原やこの國ぶりの言の葉に榮ゆる御代の聲ぞ聞ゆる
 しきしまのやまと心を人とはゞ朝日にはふ山ざくら花

新 下 德 荷 賀 田 楫 橋 林 高 小 本
 納 河 川 田 取 枝 山 澤 居
 忠 長 光 春 眞 宗 魚 子 彦 九 蘆 宣
 元 流 圀 滿 淵 武 彦 直 平 郎 庵 長

初春の初日かゞよふ神國の神のみかげをあふげもろもろ
 八東穂の瑞穂の上に千五百秋國の秀見せて照れる月かも
 かく山の尾の上に立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり
 かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが樂しき
 遠つ祖の身によるひたる緋絨の面影浮ぶ木々のもみち葉
 大日本神代ゆかけてつたへつる雄々しき道ぞたゆみあらずな
 青海原潮の八百重の八十國につぎてひろめよこの正道を
 ひとかたに靡きそろへて花すすき風吹く時ぞみだれざりける
 かきくらす亞米利加人に天つ日のかかやく國のてぶり見せばや
 わが國はいともたふとし天地の神の祭をまつりごとにて
 君がため花と散りにしますらをに見せばやと思ふ御代の春かな
 大君のためには何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも

荒木田久老
 橘千蔭
 上田秋成
 栗田士滿
 蒲生君平
 賀茂季鷹
 平田篤胤
 香川景樹
 藤田東湖
 足代弘訓
 加納諸平
 月照

大君の宮敷きましし櫛原のうねびの山の古おもほゆ
 君が代を思ふ心のひとすぢに吾が身ありとはおもはざりけり
 大君の御贄のまけと魚すらも神世よりこそつかへきにけれ
 身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬともとどめおかまし大和魂
 岩が根も砕かざらめやものふの國の爲にと思ひ切る太刀
 あまざかる蝦夷をわが住む家としてならぶ千島のまもりともがな
 天皇に仕へまつれと我を生みし我がたらちねぞたふとかりける
 鹿島なる經津のみ靈のみ劍をこころに磨ぎて行くはこの旅
 やすみししわが大君のしきませる御國ゆたかに春は來にけり
 朝廷邊に死すべきいのちながらへて歸る旅路の憤ろしも
 君がため命死にきと世の人に語り繼ぎてよ峰の松風
 天皇の御楯となりて死なむ身の心は常に樂しくありけり

鹿持雅澄
 梅田雲濱
 石川依平
 吉田松陰
 有村治左衛門
 徳川齊昭
 佐久良東雄
 高橋多一郎
 大倉鷺夫
 有馬新七
 松本奎堂
 鈴木重胤

曇りなき月を見るにも思ふかな明日はかばねの上に照るか
 しづたまき数ならぬ身も時をまちて君がみ爲めにならむとぞ思ふ
 青雲のむかふすきはみすめらぎのみいつかゞやく御代になしてむ
 ますらをが思ひこめにし一筋は七代かふとも何たわむべき
 大君の御楯となりて捨つる身と思へば軽きわが命かな
 みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ舟より遠くものをこそ思へ
 執り佩ける太刀の光はものふの常にみれどもいやめづらしも
 君が代はいはほと共に動かねばくだけてかへれ沖つしら浪
 大山の峰の岩根に埋めけりわが年月の大和だましひ
 武夫のたけき鏡と天の原あふぎ尊め丈夫のとも
 片敷きて寝る鎧の袖の上に思ひぞつもる越の白雪
 大君の御旗の下に死してこそ人と生れし甲斐はありけれ

吉村虎太郎
 児島草臣
 平野國臣
 澁谷伊與作
 津田愛之助
 佐久間象山
 久坂玄瑞
 伴林光平
 眞木和泉
 平賀元義
 武田耕雲齋
 田中河内介

ものゝふのやまと心をより合せただひとすぢの大綱にせよ
 後れても後れてもまた君たちに誓ひしことをわれ忘れめや
 春にあけてまづ読む書も天地のはじめの時とよみ出づるかな
 男山今日の行幸の畏きも命あればぞをろがみにける

野村望東尼
 高杉晋作
 橘曙覧
 大隈言道

口、軍馬祭の歌

無告の戦士軍馬を愛し其勞苦を慰めませう

大空高く仰ぎ見よ
 旭日は登る富士の嶺
 天地を照らす皇道に
 光輝く大日本
 明治の御帝畏くも
 人馬同體同人の

大御心を戴きて
 此の戦にたふれたる
 無告の戦士おもひやり
 まつりなぐさむ軍馬祭
 世界無比なるこの盛儀
 日本文化の精神ぞ

故 仁保活曉師作

○ 本社特別 贊助員 成光館主 河野源殿の善行

模範納税組合として今回表彰されたる東京市神田區元佐久間町納税組合の代表者河野源殿は本年六十四歳信州の産、小學校卒業後一少年の身を以て帝都に上京、徒手空拳あらゆる困苦缺乏と戦ひつゝ、商界に進出、圖書出版賣買に成功し財數十萬を築き押しも押されもせぬ立志傳中の人となつた、而かも此間公共事業に財を提供するのみならず常に親和主義を實行せるため殆んど敵なく實に温厚篤實、商才豊富、業界の衆望篤く本社創立當時眞先に特別贊助員として快諾され豫て國民の二大義務の一たる納税に熱心従事しつゝ、あつた、今回の表彰は誠に國民としての名譽と稱すべきである愈々健康を増進し納税、出版報國に努力せらるゝ様祈つて止まぬ。

● 本社特別 表贊意家 前田利爲大將閣下陣歿

新生ボルネオ建設の偉業半ばにして陣歿を遂げた前ボルネオ方面陸軍最高指揮官侯爵前田利爲大將ならびに副官臼井唯一少佐、陸軍技師阿野勝太郎操縦士の英靈三柱を永へに祀る陸軍葬は昨秋十一月二十日午後一時半から築地本願寺で葬儀委員長東部軍司

令官中村孝太郎大將以下各遺族、内外顯官、陸軍儀仗兵東部第三部隊全將兵ら約四千名參列の下に嚴かに執行された出棺式を終へた三英靈の遺骨は午後零時五十分相次いで本願寺に到着、本堂正面祭壇奥の白木の柩に安置せられた、祭壇兩側には畏くも秩父宮家をはじめ奉り高松宮、三笠宮以下各宮家よりの櫛の御供花、各大臣、陸軍三長官その他よりの盛花が所狭いまでに供へられ、三柱の遺影が大將を中心でありし日の温顔を偲ばせる導師京都紫野大徳寺貫主太田晦巖老師、嚴かに引導を與へたのち、秩父宮家を始め奉り各宮家の御代拜に入る、嚴かに鳴り響く鼓鉦、磬子、哀音切々たる鑿の響きにつれて、香煙は縷々として立ちのぼり、ほのゆるる法燈の灯影にああ、いまは聲もない遺影三柱、葬儀委員長中村大將の弔辭につゞいて、祭壇前に進んだ東條兼攝陸相の弔辭を讀む聲はいく度か涙に曇つて途絶える、つゞいて杉山參謀總長、寺内南方軍最高指揮官、各地軍司令官の弔辭を終れば、この時弔銃の響きが本堂を揺がした、かくて齋主中村大將に續いて喪主故前田利爲大將嗣子利建氏、菊子未亡人、令孫利祐君（八才）以下いたくない五人の令孫、故臼井唯一少佐嗣子啓一君（九才）ユキ未亡人、故阿野勝太郎操縦士嚴父仙藏氏につゞいて東條首相も恭しく焼香、總代會葬者土肥原陸軍大將以下由縁の軍官民代表等佛前に焼香、同四時滞りなく盛儀を終了した

◎天光社々則

◎目的及事業

第一條 本社ハ歴代天皇ノ宏大無邊ナル天恩ノ奉謝ヲ經トシ太陽旭光ノ高大無限ナル光恩ノ禮讚ヲ緯トスル天光道ト稱スル極メテ穩健中正ニシテ而カモ最高權威アル思想精神道德ヲ祖國並ニ全世界ニ普及シ以テ全世界ヲ常ニ明朗平和ニナシ國民並ニ全人類ノ幸福ヲ計ルヲ目的トス

第二條

- 本社ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ先ツ左ノ事業ヲ逐次行フ
- 一、「健康部」ヲ設ケ先ツ健康第一ヲ主トシテ毎朝皇祖皇宗ノ神靈ニ對シテ奉リ謹ンデ拜禮シ護國ノ諸神並ニ我家ノ祖先ノ靈ニ對シ敬禮シ教育勸語ヲ捧讀シ旭光ヲ拜浴シ又各種ノ天光的運動ヲ行フ
 - 二、「出版部」ヲ設ケ圖書並ニ雜誌「天光」ヲ發行シ天光道ノ普及宣傳ヲ行フ
 - 三、「講演部」ヲ設ケ社長以下社員及同志ニ依頼シテ天光道ノ普及講演ヲナス
 - 四、「相談部」ヲ設ケ不幸煩悶アル各方面ノ人々ノ本和解決ヲ計リ共存共榮

ヲ計ルモノトス

五、「正貫部」ヲ設ケ正義ヲ貫ク天光義勇隊ヲ組織シ合法的熱烈無比ノ言論文章身ヲ以テ範ヲ示シ且實踐躬行等ヲ以テ道德上ノ不正ヲ擊滅シ正義ノ必勝ヲ斷行ス

右ノ外必要ニ應シ各種ノ事業ヲ行ハントス

◎名稱及事務所

第三條 本社ハ天光社ト稱ス

第四條 本社ハ本部ヲ皇國ノ首都東京市ニ置キ逐次全國ニ支部ヲ設置ス

◎會員

第五條 本社ノ目的及事業ニ共鳴シテ入會スル方ヲ正會員トス

- 一、入會セントスル方ハ住所氏名ヲ正記シ一年分會費三圓ヲ添へ本社宛申込マレタシ
- 二、正會員ヘハ圖書「天光道」ト雜誌「天光」トヲ贈呈ス

◎賛助員

第六條

本社の目的事業ニ賛成シ資金援助下サル賛助員ハ左ノ三種トス

- 一、正賛助員ハ金拾圓以上ヲ賛助下サル方トス正賛助員ヘハ「天光章」ヲ贈呈ス
 - 二、特別賛助員ハ金百圓以上ヲ賛助下サル方トス特別賛助員ヘハ「特別天光章」ヲ贈呈ス
 - 三、名譽賛助員ハ金千圓以上ヲ賛助下サル方トス名譽賛助員ヘハ「名譽天光章」ヲ贈呈ス
- 右各賛助員ヘハ圖書「天光道」ト雑誌「天光」ヲ贈呈ス、其他各會合ニ招待ス

◎全社員

第七條

本社ハ一切ノ社務ヲ處理スル爲左ノ社員ヲ必要ニ應シ逐次置ク

總裁	一名	副總裁	一名	顧問	若干名
社長	一名	副社長	一名	社員	若干名

第八條

總裁並ニ副總裁ハ本社ヨリ推戴ス

第九條

社長ハ社務一切ヲ指揮監督ス 副社長ハ社長ヲ補佐シ社長支障アル場合ニ於

第十條

テ其職務ヲ代理ス 社員ハ社長ノ命令ニ服從シ各其分擔事務ヲ處理ス 將來必要ニ應シ社則ヲ追加訂正スルコトアルベシ

東京市本郷區眞砂町三十七番地

皇紀二五九五年
昭和十年
西曆一九三五年

○天光社本部

電話小石川(85)六〇三六番
振替東京三五三〇五番

◎本社々則追加

○表忠章

第十一條

常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ其本業ヲ忠實ニ勵ミ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ光輝アル皇國精華ノ美ヲ發揚シ言行共ニ一般國民並ニ全人類ノ模範タルヲ示ス偉功拔群ノ方ニ表忠章ヲ贈呈シ永ク其名譽ヲ表彰ス

昭和十二年八月吉日

天光社表忠部



(参考)

表忠章創定の歴史

世界唯一の紋章

本章は太陽旭光の下に忠の唯一字を表したるものにて之は今を去る事二十六年前即ち明治四十四年五月八日
本社長柴田外吉が陸軍歩兵少尉に任官の際新調せる軍刀の柄に盡忠の誠意を罩めて鏤め大正七年十一月一日
大正大元帥陛下御統監の陸軍特別大演習に参加し部隊長として奮戦健闘し更に彼の大正十二年九月一日關東
大震災に際しては決死の覺悟にて身を以て猛火を撃退し無事御眞影を奉安し、殊に昭和十一年二月二十六日
突發せる空前の大不祥重大事件に際しては決死的覺悟を以て在郷將校の軍服に武裝し單身徒步(全交通機關
は停止さる)にて非常警戒線を突破し、二重橋の前方馬場先門に到り歩哨三名衛兵七名特別警戒備査部長以
下四名立會の下に皇運悠久を祈る爲天皇、皇后兩陛下、大日本帝國の萬歳を大聲高唱し、更に進んで戒嚴司
令部、在郷軍人會、僧行社(川島陸相始め各軍事參議官宿泊す)靖國神社、遠く明治神宮に歴訪歴拜し皇國
安泰を祈願せる等由緒ある紋章を今回我天光社の表忠章に應用せるものなり。

◎今や時局は大東亞戦争大決戦迫る時一層
其重大性を日に日に加へて來た眞に一億
一心愈思想精神界總動員舉國總進軍の秋

◎ 貴下のため 祖國のため 全人類の爲
奮つて大に 御賛助 御入會 を熱願す

青	總	表	相	講	出	健	社
年	務	忠	談	演	版	康	長
外	部	部	部	部	部	部	兼
社	長	長	長	長	長	長	正
員	白	柴	高	奧	加	橋	貫
一	田	山	平	藤	爪	藤	部
同	石	文	丈	隆	彦	由	長
謹	次	鐵	太	久	七	郎	柴
白	始	郎	血	郎	七	郎	田
							外
							吉

★ 至誠熱烈無比 ★
○ 明朗親和無類 ○



賛助員及
表賛意家

芳名録

(順序不同)

昭和十八年一月一日現在

元内閣總理大臣	男爵	平	沼	騏	一	郎	閣	下
元内閣總理大臣		林		銑	十	郎	閣	下
元内閣總理大臣		廣	田	弘		毅	閣	下
陸軍大將		陸	木	孝		雄	閣	下
陸軍大將		陸	菱	刈		隆	閣	下
海軍大將		有	馬	良		橘	閣	下
元遞信大臣		永	井	柳	太	郎	閣	下
元商工大臣		伍	堂	卓		雄	閣	下
元鐵道大臣		前	田	米		藏	閣	下
伯爵		阿	部	正		直	閣	下
子爵		三	室	戶	敬	光	閣	下

陸軍中將

井上

一次閣下

以下略ス

◎滿天下の讀者各位へ至急御願ひ◎

今や大東亞戰爭進展し精銳無比の皇軍は海に陸に空に赫々たる大戦果を擧げつゝあるは誠に快心の至りである之ぞ本社多年の大聲高唱しつゝある必勝の精神力と日頃猛訓練の必要を説く實例を示すものと聊か意を強うする次第である、然るに敵は世界に名だたる二大強國である戦は之からである此空前の戦局に直面し一層正しく大に活躍したいと思ひますから、誠にすみませんが至急御賛助又は御入會下さいまして御後援下さる様特に御願ひ申します。

天光社本部

安田貯蓄銀行	安田銀行	第百銀行	昭和銀行	鐵鋼統制會	朝鮮紡織株式會社	日本興業銀行	清組	王子製紙株式會社	沖繩製糖株式會社	三共株式會社	早山石油株式會社
三井銀行	第一銀行	朝鮮銀行	南滿洲鐵道株式會社	豐年製油株式會社	關東電化工業株式會社	大正海上火災保險株式會社	東神倉庫株式會社				

日本鋼管株式會社	千代田生命保險相互會社	日產火災海上保險株式會社	日本海汽船株式會社	國際汽船株式會社	大阪製鋼株式會社	高砂暖房工事株式會社	日本高周波重工業株式會社	滿洲重工業開發株式會社	大日本製糖株式會社	中外電氣產業株式會社	日本タンクステン株式會社	三菱倉庫株式會社	日鐵鑛業株式會社	富國徵兵保險相互會社	キリンビール株式會社	鯛生產業株式會社	協和化學東京事務所	關東製鋼株式會社	三井農林株式會社
----------	-------------	--------------	-----------	----------	----------	------------	--------------	-------------	-----------	------------	--------------	----------	----------	------------	------------	----------	-----------	----------	----------

東洋一の主婦之友
婦人雜誌

主婦之友社長

石川 武美

新古書畫、刀劍一切買入
出版物ストック大量買入

太洋社本店

東京市本郷區眞砂町三十七番地
(市電 春日町下車)
電話小石川(85)六〇三六番(呼)

齒科醫術一切親切本位

奥平齒科醫院

東京市本郷區眞砂町三十七番地
(市電 春日町下車)
電話小石川(85)二〇四二番(呼)

法律事務一切至誠取扱

加藤法律事務所

東京市本郷區眞砂町三十七番地
(市電 春日町下車)
電話小石川(85)二三三八番

昭和拾八年二月五日印刷
昭和拾八年二月十一日發行

不許
複製

發行所

東京市本郷區眞砂町三十七番地

天光社本部

振替東京三五三〇五番
電話小石川(85)六〇三六番

天光 年頭驀進の巻 奥附

正價 金八十錢

編輯兼發行人 柴田外吉
東京市本郷區眞砂町三十七番地

印刷人 太田持定
東京市神田區旭町三番地

印刷所 文持堂印刷所
東京市神田區旭町三番地

432
202

發行所

東京市本郷區
真砂町三十七
振替東京三五三〇五番
電話小石川六〇三六番

天光社本部

次目内容

總力發揚の近狀、兒島高德、其他の詩吟集、
 本社翼贊の歌、兒島高德、其他の詩吟集、
 大政全機構の大刷新、二階級進級の特例を開く、
 陸軍美談トチカヘ肉弾、表忠部長、高山鐵血
 忠烈美談僅か四人で敵八百を捕ふ、
 大膽美談骨も砕きて英靈に應へん、
 身を削り骨も砕きて英靈に應へん、
 總力發揚には國民精神昂揚が第一、
 總力發揚は先づ隣組から(隣組の歌)、
 防空精神の振起と防空作業の整備強化、
 防空隣組長、柴田外吉
 防空群長、柴田外吉

天光
大働清遊の巻

口繪寫真四頁無類
 全文熱烈無比六十六頁
 四六判洋裝美本
 正價金五十錢
 送料金四錢

★長期總力發揚の要諦を説く柴田天光社長の大獅子吼

口繪寫真 無敵皇軍の戦勝と帝都防空部隊の熱戦ぶり
 口繪寫真 天光社長柴田家の長期家庭教育の成果今ぞ現る
 口繪寫真 世界唯一の紋章を有する柴田天光社長の軍刀と白瀬中尉
 口繪寫真 櫻花滿開春色酣なる伊豆の清境と清遊の本社員社友の面々



曲學阿世や詭ひ著者の死書に非ず
一死眞に正しき盡忠報國を熱叫してやまぬ

柴田天光社長

の大獅子吼大血涙戦記を讀め
全國民全人類に敢てすゝむ



天出陣の巻

四六判 正價五十錢
全一冊 送料四錢

昭和十年正月決死の覺悟を以て決然本社
を創立奮闘幾多の迫害誤解を排撃敢然激
闘の出陣血録也



天大政翼賛の巻

四六判 正價五十錢
全一冊 送料四錢

眞に正しき大政翼賛の基準と心構を熱烈
大膽に示し加ふるに有名なる東條首相の
戦陣訓を載せ錦上更に輝く



天戰時精神の巻

四六判 正價五十錢
全一冊 送料四錢

長期大聖戦下特有の戦時精神を説き現下
一億國民の心構を最も正しく熱烈且佛國
戦敗の五大原因を述べ



天戰時生活の巻

四六判 正價五十錢
全一冊 送料四錢

二千六百年始の經濟戦下の戦時生活の
指針を示し且新体制の眞髓を説き尙日獨
伊三國同盟を詳解す



天正義貫徹の巻

四六判 正價五十錢
全一冊 送料四錢

我國皇統連綿の大殊勳者和氣公の誠忠と
國法の擁護者たる兒島大審院長の正義貫
徹を擧げ現下聖戦の貫徹を大聲高唱す



天皇紀奉祝の巻

四六判 正價五十錢
全一冊 送料四錢

悠久二千六百年を奉祝し支那事變處理完
遂大業促進を正しく大膽に説くこと天下一
品



發行所

東京本郷區
眞砂町三七

振替東京三五三〇五番
電話小石川六〇三六番

天光社本部